

モーリシャス国水産振興計画

基本設計調査報告書

昭和 55 年 12 月

国際協力事業団

開 三
80-197

JICA LIBRARY



1063076[2]

モーリシャス国水産振興計画

基本設計調査報告書

昭和 55 年 12 月

国際協力事業団

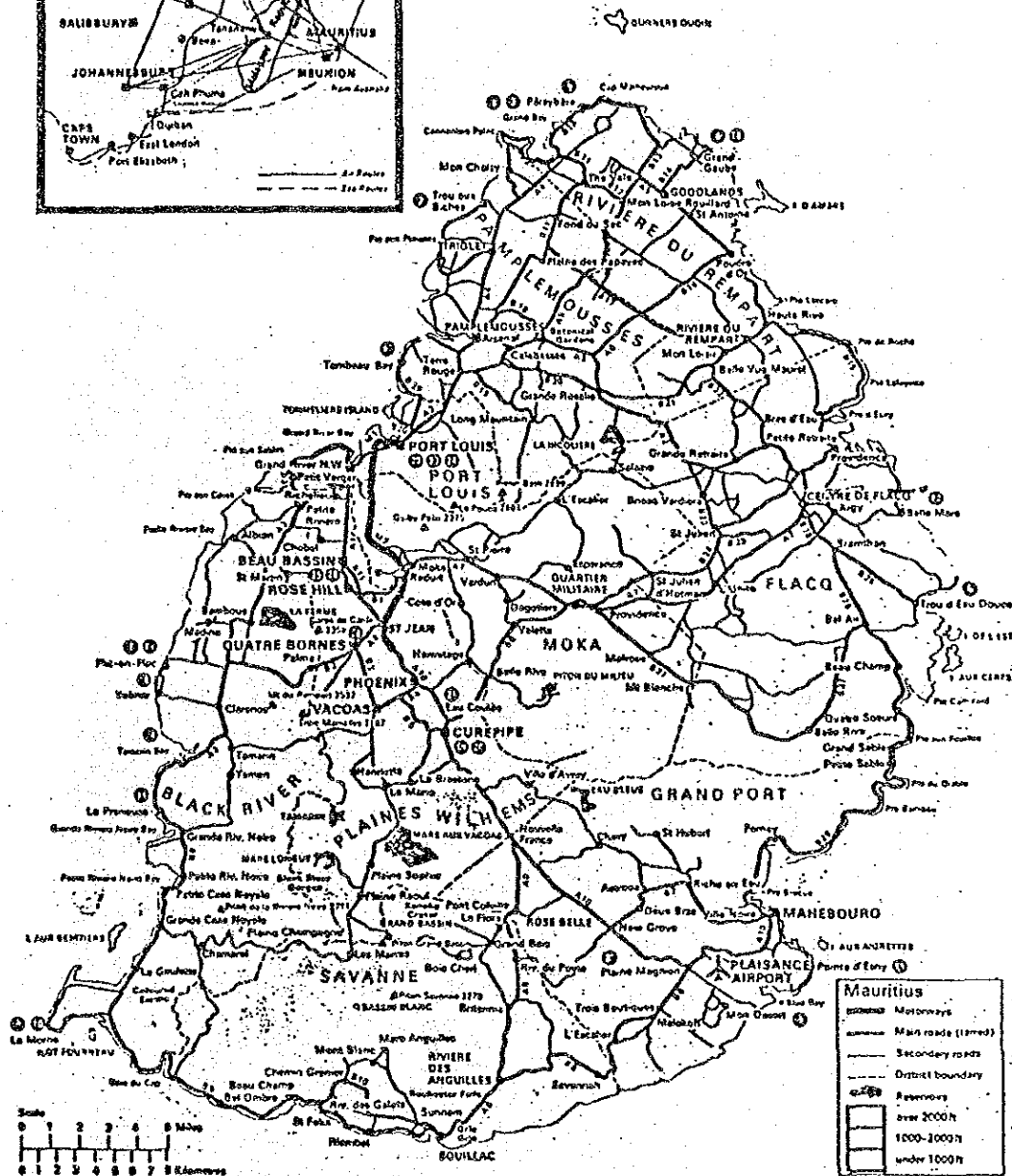
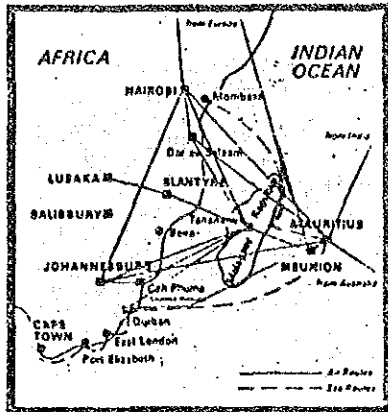
国際協力事業団		
受入 月日	'84. 4. 17	410
登録No.	03461	89
		SPS

マイクロ
フィルム作成

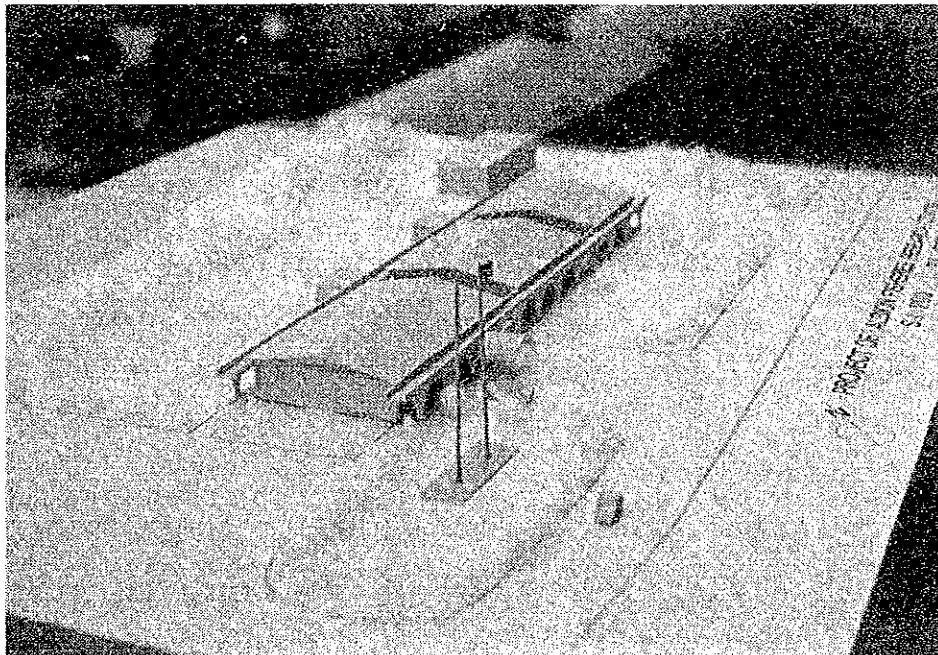
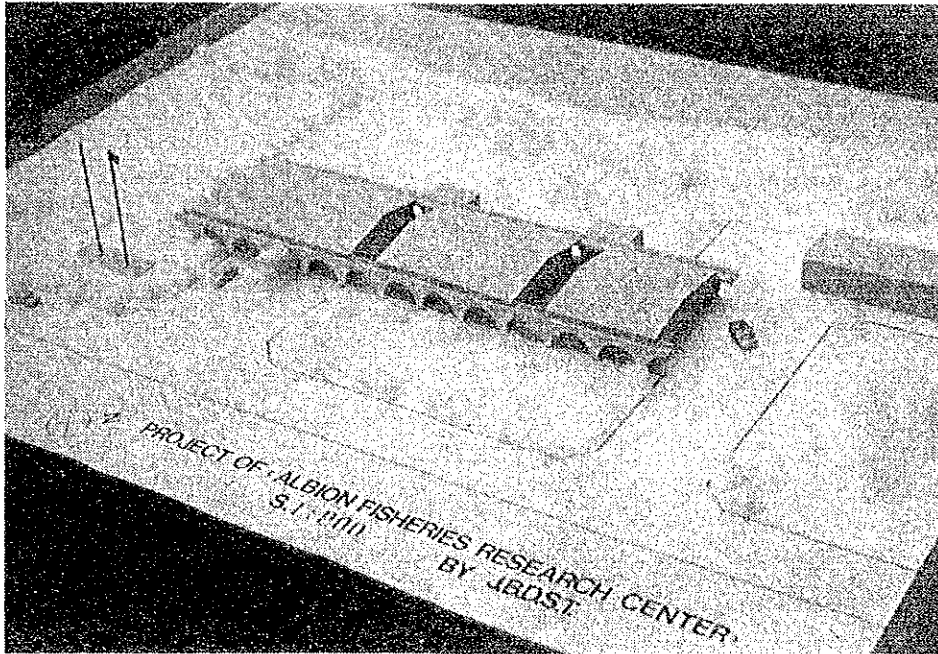
略語表

本プロジェクト	モーリシャス国水産振興計画
調査団	モーリシャス国水産振興計画基本設計調査団
本研究センター	アルビオン水産研究センター (Albion Fishery Research Center)
国家開発2か年計画	Two-Year Plan for Economic and Social Development (1980～1982)
Rs	Mauritius Rupees

モーリシャス国 (MAURITIUS)

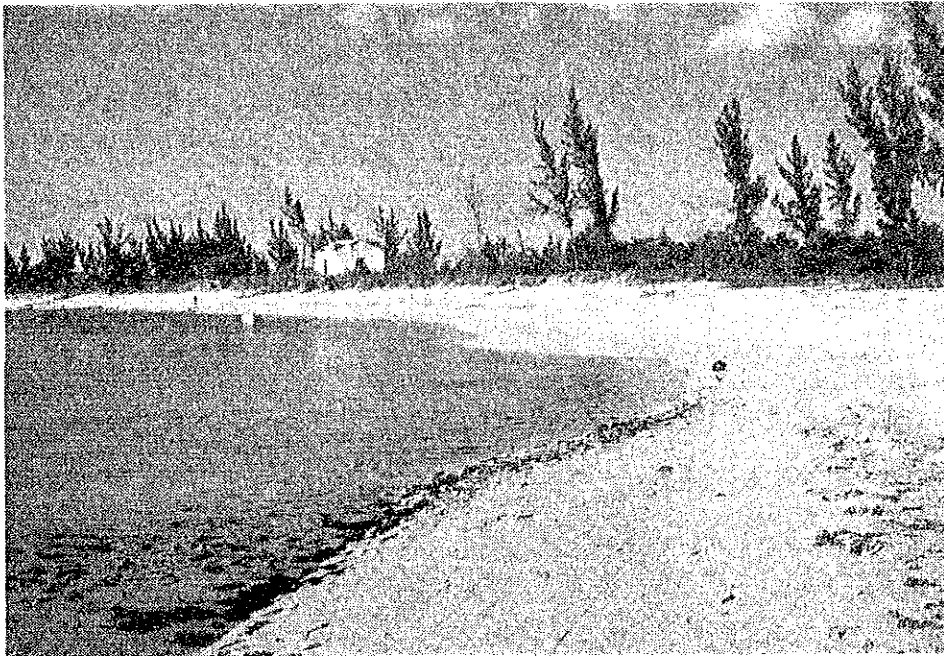


アルビオン水産研究センター 模形写真





・敷地の北東側より望む



・敷地の南西側より望む

序 文

日本国政府は、モーリシャス国政府の要請に基づき、同国が社会経済開発計画の一環として策定中の水産振興計画にかかる基本設計調査を行なうことを決定し、国際協力事業団がこの調査を実施した。

国際協力事業団は、昭和55年10月16日から11月2日まで18日間にわたり、基本設計に必要な資料収集とモーリシャス国政府関係者との協議のため、水産庁養殖研究所病原生物研究室長 原武史氏を団長とする調査団を現地に派遣した。

現地調査は、モーリシャス国政府関係者の全面的な協力を得て円滑に行なわれ、帰国後の基本設計調査報告書の作成も今般すべての作業を完了し、ここに報告書提出の運びとなった。

本報告書が本件プロジェクトの実施の促進に寄与し、ひいては同国の社会経済の発展ならびにモーリシャス、日本両国の友好親善の強化に役立つならば、これにまさる喜びはない。

おわりに、本件調査に御協力と御援助をいただいた関係各位に対し衷心より厚くお礼申し上げます。

昭和55年12月

国際協力事業団
総裁 有田圭輔

要 約

モーリシャス国は、1968年に独立したインド洋上に位置する面積2040 km²、人口約94万人（1979年）の海洋国である。人口構成は、インド系52%、クレオール（混血）28%、パキスタン系17%、中国系3%の多民族国家で、宗教においても、ヒンズー教、キリスト教、イスラム教、仏教と民族と同様に多様である。また、インドにおいて見られるような階級制度が根強く存在し、貧富の差は社会生活にも明確に現われている。

産業としては、サトウキビ栽培による砂糖の生産、輸出が中心であり、他の産業は小規模で産業構造は、サトウキビの単一構造と言える。したがって国民の日常の主食、副食の多くを輸入に依存しており、食糧の自給率を高めること、とりわけ蛋白源を確保することは重要な課題であり、この観点から水産業の振興が重視されている。

水産業の現状としては、漁民の大半がラグーン漁業に従事しており、生産性が低いため収入は他産業に比べて低く漁民の生活は貧しい。ラグーン漁業の他にはバンク漁業、遠洋漁業および内水面漁業があるが、バンクにおける資源量はかなり豊富であることから、バンク漁業が国家開発2か年計画における漁獲量増大の見地より重視されている。なお、バンク漁業あるいは遠洋漁業を振興するためには、漁船の大型化、漁具等装備の近代化を図ることが必要であり、これに伴って漁民の再教育も重要な課題であると考えられる。また、内水面漁業においては、外国からの移殖種であるオニテナガエビ、ソウギョ、ハクレン、インディアンメジャーカーブ等の養殖業がある。

モーリシャス国の周囲にはサンゴ礁で囲まれた広大なラグーンが発達し、その一部には魚介類の幼稚仔の生息の場として、岩石等で囲まれたいわゆるバラショワが存在し、その面積は268 haでありこの広大なラグーンを活用し、漁獲量を増大させることは、漁民の生活安定および国民の蛋白源の安定確保につながる最重要課題であると考えられる。そのための施策としては、カキ、イガイ、アイゴ類、ボラ、カニ、エビ等の種苗生産技術を研究して、量産技術を確立し、これを放流する資源培養型漁業の推進が考えられるが、そのためには、幼稚仔の飼料となる動植物の安定供給を行なうため、ラグーンの生態系の解明を主とした調査研究、陸水のコントロー

ル、および栄養塩の安定的供給等を検討しなければならない。一方、内水面においては、商品価値が高く、しかも生産技術が一応確立されており、現に企業化が試みられているオニテナガエビを対象として、給飼型養殖を推進することが考えられるが、そのためには、親魚の養成、人工飼料の開発および調達が必要である。

このように、ラグーンを利用した資源培養型漁業の推進と、内水面における給飼型養殖の推進は、モーリシャス国の水産振興にかかる要となるものであるが、そのためには、上記目標達成に資する水産研究センターの設立が必要であり、この点については、モーリシャス政府の関係者もその必要性を大いに認めている。

本研究センターの敷地は、首都Port Louisより西南約20 Kmのブラックリバー区に位置する国有地で、それはほぼ平坦で海および川に囲まれており、研究上不可欠の良質の井水および海水の取水が可能である。また地盤についても建築に十分な耐力を有することが確認されている。

なお、本研究センター建物施設設計上の基本方針は次の通りである。

- (1) 運営、維持管理については技術的かつ経済的に容易な設計とする。
- (2) 現地の社会生活、習慣に合致した設計とする。
- (3) 種苗生産、飼育に関する試験研究、ラグーンを主とした生態系解明のための調査研究、さらには、研究成果の普及、指導を行なうために、管理ブロック、研究ブロック、作業ブロックから成る本館とふ化実験棟および屋外飼育場を建設し、研究ブロックには研究用機器材を設置した実験室を設けること。
- (4) 実験の内容、収容人数、研究室の構成および建物の経済性から柱の間隔を決定すること。
- (5) 現地の気象条件を充分配慮して設計すること。
- (6) 建設単価を低減して機能を十分に発揮できるような機器材を設置すること。
- (7) 現地の材料、工法を充分にとり入れて工費を低減し、しかも工期を短縮すること。
- (8) 敷地全体の利用計画として、水産総合センターを仮定した場合、その中心的存在になるように配置し、印象的な外観を有すること。

これらの方針により、建設施設は、本館1150 m²、ふ化実験棟150 m²および屋外飼育場200 m²からなる。本館は、事務室・会議室・食堂を含

む管理ブロックと研究室・実験室を含む研究ブロック，さらに技術員室・用務員室・作業室・機械室を含む作業ブロックの3ブロックからなる。これら3ブロックは中庭によって互に分離されていると同時に，外廊下により連結されている。すなわち，分離と連続が建物施設の構成原理であり，水産研究センターとしての機能，現地の気候，生活習慣等を考慮して計画されるものである。

建物の主体構造としては，モーリシャス国がサイクロンの進路にあたるため，構造にある程度の耐力が必要であることおよび同国全体が火山活動によって形成された島であるために，コンクリート用の砂利および砂が豊富に存在していることに鑑み，コンクリートおよびコンクリートブロックを使用することとする。

本研究センターにおいては，試験研究，調査研究および指導普及の業務を遂行するために水産養殖，海洋生物学および化学分析のための研究用機器材が必要であり，これらを幅広い範囲で選定することが必要である。

工期としては，交換公共交通締結後，実施設計，入札業務，建設工事を経て完成引き渡しまでに約13.5か月を予定している。

建設工事費は，概算において，建設施設費3億2,000万円，研究用機器材費7,000万円，設計監理費6,000万円，合計4億5,000万円と見積られる。なお，サイクロンによる建設資材の不足，価格の上昇，工期の遅れ等もあり得るので，これらを充分考慮に入れて工事を進める必要がある。

モーリシャス国側の受入れ窓口は，漁業・協同組合開発省であり，計画敷地の障害物の除去および整地，取水設備，給電設備等を本工事着工までに完了するとの確約を得ている。なお，本研究センター設立にかかる援助効果としては次の事項が考えられる。

- (1) 動物蛋白質の安定供給
- (2) 漁民の生活安定，向上および雇用増大
- (3) 資源培養型漁業の導入による漁業の構造改善
- (4) 研究成果の指導，普及による人材の養成
- (5) 近隣諸国を対象とした第3国研修の拠点としての可能性

モーリシャス国の水産業を振興するためには，漁業資源の適正管理による広大な200海里水域での漁獲量の安定化および獲る漁業から資源培養型漁業への移行が重要な柱となる。そのためには，漁業資源の適正管理が不可欠であるが，これは，各種試験研究の成果を水産政策に的確に反映さ

せて始めて可能である。かかる見地より本研究センター設立の援助効果は非常に大きい。

目 次

序 文

要 約

第 1 章	要請の背景	1
1-1	経 緯	2
1-2	調査の目的と概要	3
1-3	調査団の編成	4
第 2 章	モーリシャス国の水産事情	5
2-1	水産資源利用の重要性	6
2-2	水産業の現状と将来展望	7
(1)	漁 業	7
1)	ラグーン漁業	7
2)	バンク漁業	7
3)	内水面漁業	8
(2)	主要魚類および毒魚	16
(3)	漁 獲 量	21
(4)	流 通	24
(5)	水産物の需給関係	28
(6)	現状と将来展望	30
2-3	水産行政および研究	31
(1)	水産行政機構	31
(2)	水産研究の現状と問題点	34
第 3 章	援助の内容とその意義	35
3-1	要請の内容および援助項目の選定	36
3-2	予想されるアルピオン水産研究センターの活動 および機能	37
3-3	合意議事録の抄約	38

第4章	設立計画	40
4-1	基本方針およびその具体化	41
4-2	基本設計	44
(1)	計画敷地	44
1)	環境および地形	44
2)	広さおよび所有者	44
3)	地質	44
4)	インフラストラクチャー	44
5)	気象条件	44
6)	交通	45
7)	計画敷地としての妥当性	45
(2)	建物施設計画	48
1)	規模および構成原理	48
2)	配置計画	48
3)	材料計画	49
4)	建築計画	49
5)	仕上計画	51
6)	構造計画	53
7)	機械設備計画	56
8)	電気設備計画	57
9)	外構施設計画	58
10)	主要室の面積	59
(3)	研究用機器材計画	61
(4)	基本設計計画図書	61
1)	基本設計図	61
2)	機器材リスト	72
4-3	実施計画	74
(1)	実施機関	74
1)	設立過程	74
2)	完成後の所轄省庁	74
(2)	工事範囲および分界点	75
(3)	建設工事費概算	75
1)	設定条件	75

2)	建設工事費概算(円)	76
(4)	建設工程計画	76
第5章	調査団の提言および結論	78
5-1	モーリシャス国水産振興計画の妥当性	79
5-2	無償資金協力の必要性および援助効果	81
5-3	技術協力の必要性	82

資料編	83
1. 基本設計調査に関する資料	84
1-1 日程表	84
1-2 合意議事録	88
1-3 モーリシャス国関係者	93
2. モーリシャス国政府に関する資料	95
3. 一般事情に関する資料	97
3-1 国土の位置	97
3-2 国土の面積	98
3-3 人口	99
3-4 地理	100
3-5 気候	101
3-6 宗教・民族	105
3-7 言語	106
3-8 独立までの歴史	107
3-9 政治	108
3-10 経済・貿易	109
3-11 通貨・金融	111
3-12 交通	112
4. 産業構造および雇用人口に関する資料	113
5. 国家開発2か年計画に関する資料	115
6. 建設に関する資料	117
6-1 建設工事の実態	117
6-2 建設関連法規	118
6-3 インフラストラクチャー	119
(1) 電気	119

(2) 井 水	119
6-4 建設資材の現況と規格	121
6-5 建設コスト	122
(1) 建設資材単価	122
(2) 工 事 費	123
(3) 建設関連業者	124
6-6 建設資材の運送	125
7. 収集資料リスト	126
7-1 現地収集資料リスト	126
7-2 国内収集資料リスト	129

第 1 章 要請の背景

1-1 経 緯

モーリシャス国は、イギリスの植民地政策の影響もあり、砂糖を主とした単一産業構造で発展してきたが、1968年の独立を契機に産業の近代化、他産業の育成強化等を柱とする産業の多角化に取り組んでおり、現在、国家開発2か年計画を推進中である。とりわけ食糧、特に動物蛋白質の安定供給という観点からも水産業の振興を重視しており漁獲量世界第1位を誇る水産国であるわが国に対し、水産関係の11項目にわたる援助要請があった。

これに対し、関係者のあいだで、無償資金協力候補案件としての妥当性および援助効果等を勘案して協議したところ、要請のうち水産研究センターの設立が最適との判断に達し、水産研究に必要な建物施設および機器材にかかる基本設計調査を行なうために調査団が派遣されることとなった。

1-2 調査の目的と概要

本調査の目的は、モーリシャス国関係者との意見交換、建設予定地の現地調査、建設のための資材の諸状況調査等を通じて、水産研究の実態把握とそれに適合する建物施設および機器材の選定にかかる基本設計作成上の資料を提供することである。

調査団は、モーリシャス国における水産業の重要性、漁業形態、水産増養殖、流通等、水産業をめぐる諸状況の実態把握、ならびに援助案件としての水産研究センターの必要性を調査するため、現地において、漁業・協同組合開発省をはじめとする政府関係者と意見を交換し、また、各種関連施設の見学を通じて、モーリシャス国の水産業を振興する上で、水産研究センターの建設が必要であること、再度確認し、本研究センター建設予定地についても水産の研究を推進するのに必要とする立地条件を具備していること、また、建物施設の建設においても問題はないとの結論に達した。

1-3 調査団の編成

調査団は、水産庁養殖研究所病原生物研究室長・原武史氏を団長として、下記の通り編成された。

団長	原 武史	総 括	水産庁養殖研究所病理部 病原生物研究室長
団員	大山雅民	業務調整 無償資金協力	国際協力事業団社会開発協力部
”	杉 重彦	建築計画総括	株式会社杉建築設計事務所・所長
”	小川 讓次	水産関連調査	” 設計室員
”	安藤 良行	建物関連調査	” 設計室員

※本調査には、株式会社杉建築設計事務所が参加した。

第2章 モーリシャス国の水産事情

2-1 水産資源利用の重要性

モーリシャス国の産業構造は、イギリスの植民地政策を反映して1968年の独立以前は、サトウキビ栽培を中心とした単一産業構造であった。このような産業構造は社会的にも経済的にも不安定であるので、独立を契機に産業の多角化を推進してきている。

食糧のかなりの部分を外国からの輸入に依存しているモーリシャス国にとって、畜産物の値上りは国家経済を圧迫し、動物蛋白質を自国生産が可能であり、安価で、しかも食習慣に取入れられている水産物に求める施策が講じられている。

モーリシャス国は、国家開発2か年計画で、国民1人当たりの水産物の消費量を1978年の17kgから1982年には18kgに増加させることを目標としている。この目標を達成するためには、人口増加率を勘案すると1982年には17,3000tが必要となり、1978年に比べて2,064tの増加分を確保しなければならない。その供給については、自国の漁獲8,400t、外国からの輸入8,900tによって行なうとしているが、輸入依存度が高く、漁業生産の増加が望まれている。

周囲を海に囲まれているモーリシャス国は、その広大な200海里経済水域内における未利用の漁業資源の開発、漁獲量の増加による生産増あるいは水産養殖の推進によって自給率を高めることが可能であることから、水産業を国家的事業として重要視している。

2-2 水産業の現状と将来展望

(1) 漁業

モーリシャス国の漁業は、Mauritius 島および Rodrigues 島において行なわれているラグーン漁業、Mauritius 島を基地とするバンク漁業および Mauritius 島における内水面漁業に大別することができる。

1) ラグーン漁業

この漁業は、珊瑚礁に囲まれたラグーン（写真1）およびその外側の比較的水深の浅い場所で行なわれる伝統的漁業である。ラグーン内では、ピログ（Pirogues）と呼ばれる長さ6m前後の木製小型ボートが使用され（写真2）、ラグーンの外側では、ピログの外、長さ9mから12mのピンネス（Pinnace）が使用され、一部動力化されているものもある。使用される漁具は、網（刺網、曳網など）、銚、籠（主に竹製）、釣である（写真3および4）。

Mauritius 島におけるラグーンは図2-1に示すように、南岸を除くほぼ全域を囲む広大な面積を占めている。ラグーン漁業の主要な漁場は、同島南西沿岸および北東沿岸に発達するラグーンの内側および Gran Baie, Grand Gaube, Trou d'Eau Douce の各地に発達するラグーンの外側である。Rodrigues 島においても Mauritius 島と同様にラグーン漁業が営まれている。

ラグーン漁業は、Black River 地区の漁村での聞き取り調査によると、年間の操業日数は約200日であり、天候や海洋条件によって操業が左右され、安定した漁獲をあげることが難しい。

バラショワ（Barachois）は、ラグーンの中の比較的浅い場所を岩石等で囲い、沖側に数カ所の開口部を持った漁業のための施設である。その面積は、小さいものは0.5haから大きいものでは50haと様々である。現在、Mauritius 島には、25カ所、268haのバラショワがあるが、同島北東岸の Grand Gaube 近郊にあるバラショワでカキ養殖が行なわれている外は、増養殖という見地からの積極的な利用はされていない（写真5）。

2) バンク漁業

Mauritius 島から Seychelle 群島に至る海域には、図2-2に示すように多くのバンク（Bank）が点在し、それらのいくつかは、好漁場を形成し、バンク漁業が行なわれている。

この漁業は、冷蔵設備を装備する66tから235tの船が数隻のピローグを漁場まで運搬して操業する一種の母船式漁業である。主要な漁場は図2-2に示すように、Mauritius島より130海里から1,150海里のインド洋上にある。Nazareth, Cargados Carajos (St. Brandon), Saya de Malha, Agalega などのバンクである。バンク漁業の操業日数は、通常一航海約3週間である。

その他の漁業としては、近年、旋網漁船が導入され、カツオ・マグロ漁業等の遠洋漁業の開発が進められている。

3) 内水面漁業

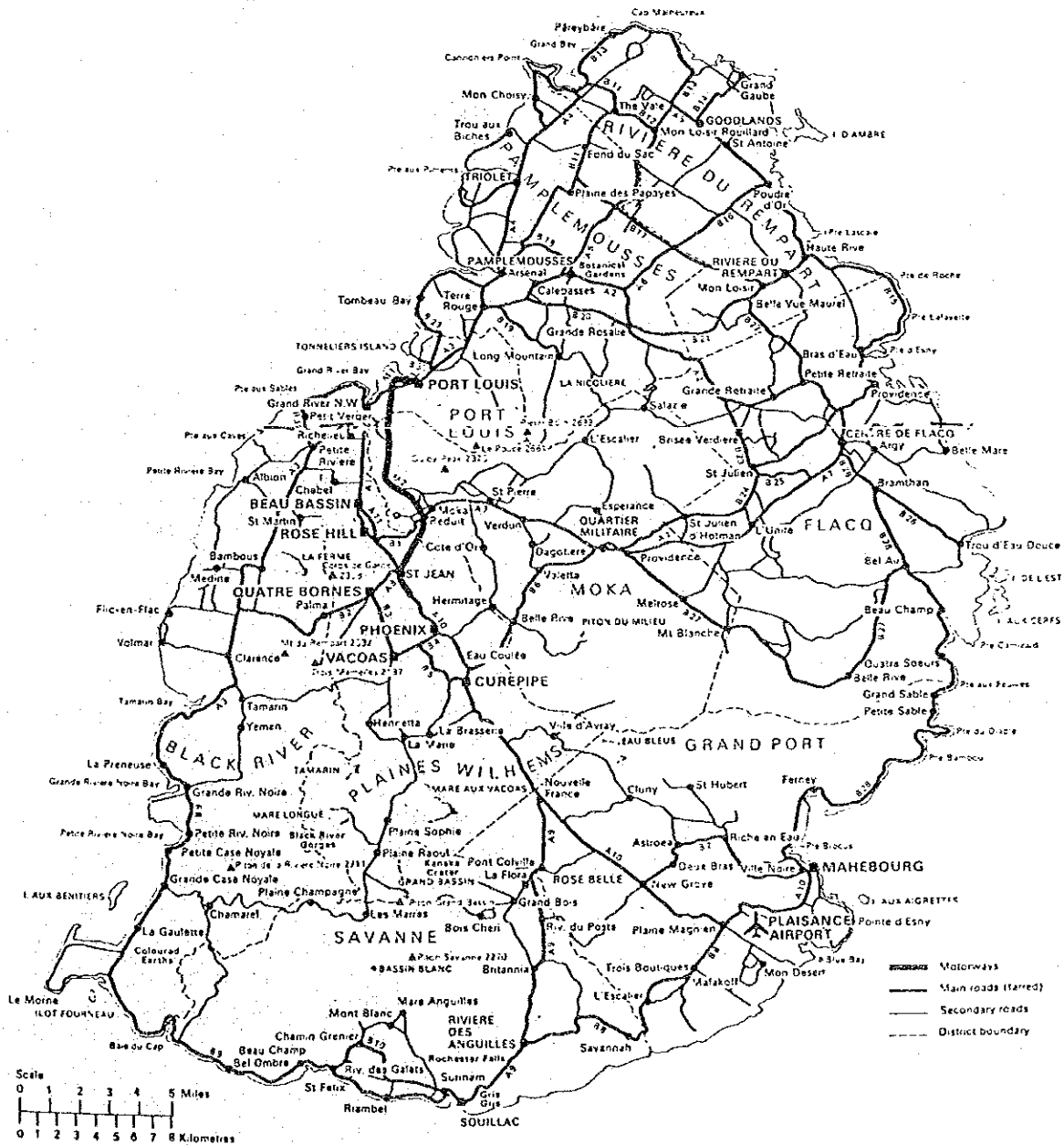
モーリシャス国における内水面漁業は、サトウキビ畑の灌漑を目的として作られた1,200haにおよぶ灌漑用水池の有効利用と海面漁業による食用魚類の供給量の不足、特に冬期の貿易風による操業不能に起因する一時的供給不足を補う目的で、他地域からの魚類等の移殖によって開発された。

魚類等の移殖を歴史的に見ると、

移殖年	移殖魚類	学名	供給地
1934	ニジマス	<u>Salmo gairdnerii</u>	南アフリカ
1944	ブルーギル	<u>Lepomis macrochirus</u>	東アフリカ
1960	インディアン・	<u>Catla catla</u>	インド
1973	メジャーカーブ	<u>Labeo roita</u>	
1961	ジャイアント・グラミー	<u>Osphronemus goramy</u>	インドネシア
1972	オニテナガエビ	<u>Macrobrachium rosebergii</u>	ハワイ
1975 ～6	インディアン・ メジャーカーブ	<u>Cirrhinus mrigala</u>	インド
1975 ～6	ソウギョ	<u>Ctenopharyngodon idella</u>	インド
1975 ～6	ハクレン	<u>Hypophthalmichthys molitrix</u>	インド

となっている。

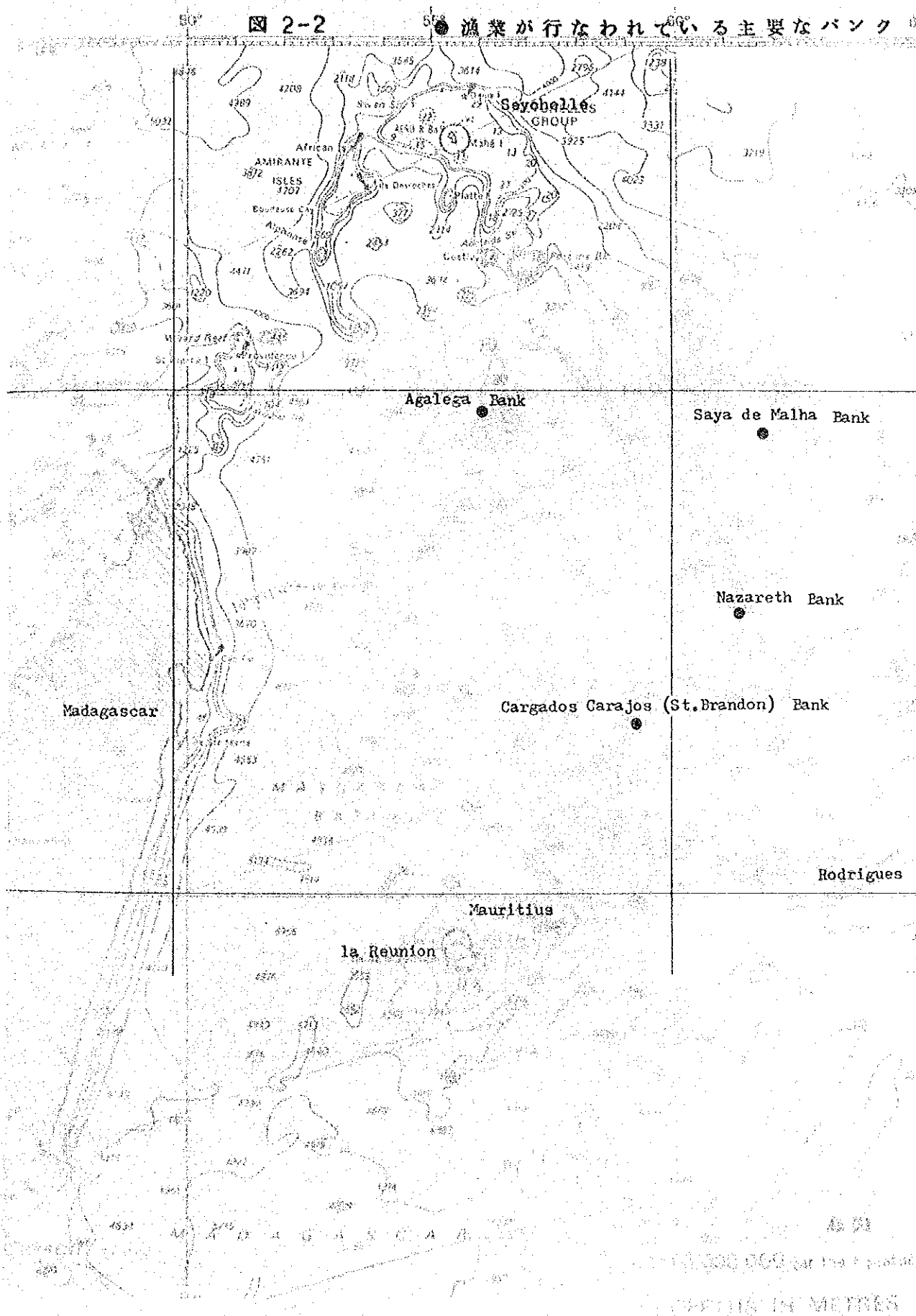
モーリシャス国においては、オニテナガエビ、インディアン・メジャーカーブ、ソウギョ、ハクレンの4種の食性を異にする魚種を同一養殖池に収容するいわゆる混養が行なわれている。



モーリシャス国

図 2-2

漁業が行なわれている主要なバンク



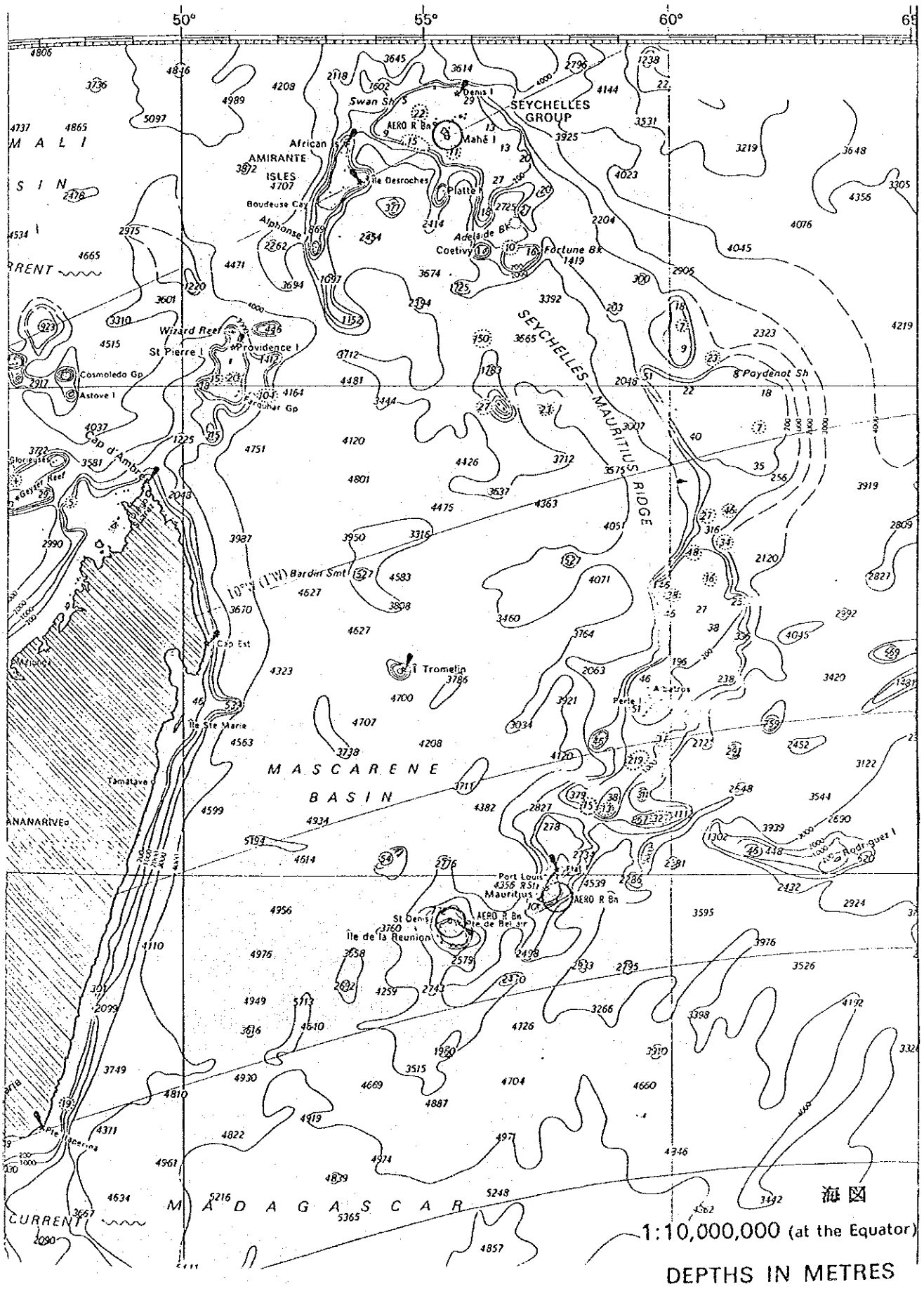


写真1

Mauritius 島海岸線の珊瑚礁と
それに囲まれたラグーン



写真2 ラグーン漁業に使用するピローグ



写真3 漁網修繕風景 Black River の漁村で



写真4
ラグーン漁業に使用
される竹製の籠

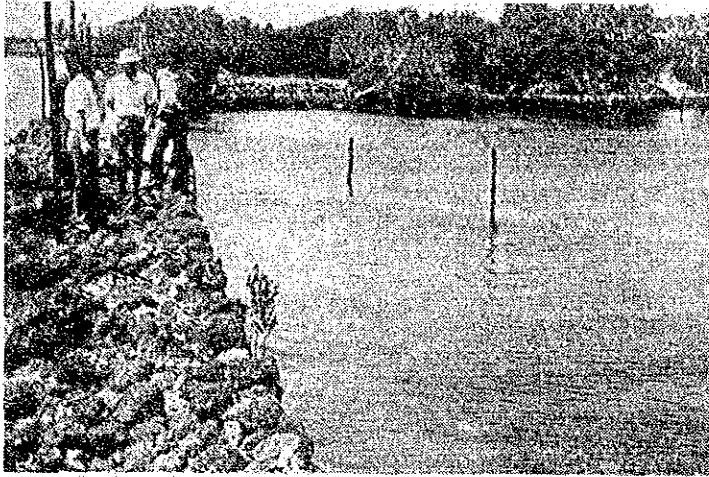


写真5 Grand Gaube 近郊のカキ養殖の行なわれて
いるバラショワ

(2) 主要魚類および毒魚

現地調査で収集された資料によると、モーリシャス国の魚類相は、31日、123科にのぼり、表2-1は、その内の主要魚種を分類整理したものである。このうち食用として利用されている魚類は、フェフキダイ科、フェダイ科、サバ科、ハタ科、サバヒー科、ボラ科、アオブダイ科に属する魚種である。

熱帯・亜熱帯地域の特徴として、珊瑚礁には、毒魚も多く、モーリシャス国においても漁獲される魚類の中に毒魚が含まれている。特にハタ科、フェダイ科魚類に多く、しばしば、食中毒、いわゆるシガテラを引き起こすことがある。主な毒魚は、表2-1中、*印を付して示した。

シガテラは、珊瑚礁の魚類による死亡率の低い食中毒の総称であるが、水産資源を食糧として利用する上で、食品衛生上無視できない問題である。このようなことから、モーリシャス国においては、毒魚のスクリーニング、漁獲された魚類の毒性試験など、きめ細かい監視体制がとられている。

モーリシャス国における毒魚に関する最初の報告は、1601年にさかのぼり、古くからその存在が知られている。また、1876年の官報* №59によって、表2-2に示す17種類の魚介類が販売を禁止されている。

多種類にのぼる魚類の中で、シテンヤッコ科、チョウチョウウオ科、ニザダイ科、スズメダイ科、ベラ科などに属する魚種は、観賞用としての価値も認められるが、現地においては利用されていない。

* Regulation for the Management of Public Markets and for the Sale of articles of human food in the Rural District elsewhere than in Shops or Public Market.

表2-1 モーリシャス国における主要魚類

科名	和名	学名	学名
フエフキダイ科	フエフキダイ類	<u>Lethrinus</u>	<u>xanthocheilus</u>
	"	<u>L.</u>	<u>nebulosus</u>
	"	<u>L.</u>	<u>crocineus</u>
	"	<u>L.</u>	<u>mahsena</u>
フエダイ科	アミフエフキ	<u>L.</u>	<u>reticulatus</u>
	フエダイ類	<u>Lutjanus</u>	<u>vaigiensis</u>
	"	<u>L.</u>	<u>duodecimlineatus</u>
	ヨスジフエダイ	<u>L.</u>	<u>kasmira</u>
	イツテンフエダイ	<u>L.</u>	<u>monostigma</u>
	*フエダイ類	<u>L.</u>	<u>rivulatus</u>
	* "	<u>L.</u>	<u>russelii</u>
	*バラフエダイ	<u>L.</u>	<u>bohar</u>
	*ヒメフエダイ	<u>L.</u>	<u>gibbus</u>
	アオチビキ	<u>Aprion</u>	<u>virescens</u>
	シマチビキ	<u>Tropidinus</u>	<u>zonatus</u>
	オオヒメ	<u>Pristipomoides</u>	<u>filamentosus</u>
サバ科	キハダ	<u>Thunnus</u>	<u>albacares</u>
	イソマグロ	<u>Gymnosarda</u>	<u>unicolor</u>
	ヤイト	<u>Euthynnus</u>	<u>affinis</u>
	カツオ	<u>E.</u>	<u>pelamis</u>
	カマスサワラ	<u>Acanthocybium</u>	<u>solandri</u>
	ハタ科	*アオノメハタ	<u>Cephalopholis</u>
*バラハタ		<u>Variola</u>	<u>louti</u>
カケハンハタ		<u>Epinephelus</u>	<u>morrhus</u>
*オオモンハタ		<u>E.</u>	<u>areolatus</u>
モヨウハタ		<u>E.</u>	<u>megachir</u>
アカハタ		<u>E.</u>	<u>fasciatus</u>
カンモンハタ		<u>E.</u>	<u>merra</u>
ホウセキハタ		<u>E.</u>	<u>chlorostigma</u>
*ヒトミハタ		<u>E.</u>	<u>tauvina</u>

	マダラハタ	<u>E.</u>	<u>fuscoguttatus</u>
	*アヅキハタ	<u>Anyperodon</u>	<u>leucogrammicus</u>
	*	<u>Liopropoma</u>	<u>lunulata</u>
	*スジハタ	<u>Plectropomus</u>	<u>maculatus</u>
アジ科	カスミアジ	<u>Caranx</u>	<u>melampygius</u>
	アジ類	<u>C.</u>	<u>carangus</u>
	ロウニンアジ	<u>C.</u>	<u>ignobilis</u>
サバヒー科	サバヒー	<u>Chanos</u>	<u>chanos</u>
アオブダイ科	ミノレブダイ	<u>Leptoscarus</u>	<u>vaigiensis</u>
		<u>Scarus</u>	<u>enneacanthus</u>
		<u>S.</u>	<u>ghobban</u>
		<u>S.</u>	<u>capitaneus</u>
ボラ科	ボラ	<u>Mugil</u>	<u>cephalus</u>
	"	<u>M.</u>	<u>seheli</u>
アイゴ科	シモフリアイゴ	<u>Siganus</u>	<u>oramin</u>
エソ科	エソ類	<u>Synodus</u>	<u>indicus</u>
メイチダイ科	メイチダイ類	<u>Gnathodontex</u>	<u>spp.</u>
クロサギ科	クロサギ	<u>Gerres</u>	<u>oyena</u>
	イトヒキサギ	<u>G.</u>	<u>punctatus</u>
シイラ科	シイラ	<u>Coryphaena</u>	<u>hippurus</u>
イトウダイ科		<u>Adioryx</u>	<u>rubrum</u>
		<u>A.</u>	<u>spinifer</u>
		<u>A.</u>	<u>diadema</u>
カマス科	オニカマス	<u>Sphyaena</u>	<u>barracuda</u>
	オオカマス	<u>S.</u>	<u>jello</u>
オキイワシ科	オキイワシ	<u>Chirocentus</u>	<u>dorab</u>
チョウチョウウオ科	チョウチョウウオ類	<u>Chaetodon</u>	<u>auriga</u>
	"	<u>C.</u>	<u>melanotus</u>
	"	<u>C.</u>	<u>lunula</u>
	"	<u>C.</u>	<u>vagabundus</u>

タカサゴインモチ科

ベラ科

スズメダイ科

ハリセンボン科 *ネヅミフグ

オニオコゼ科 *

ニシン科 *ミズン

ニザダイ科 ナンヨウハギ

サザナミハギ

シテンヤッコ科

<u>Ambassis</u>	<u>commersoni</u>
<u>A.</u>	<u>gymnocephalus</u>
<u>Bodianus</u>	<u>axillaris</u>
<u>B.</u>	<u>diana</u>
<u>Cheilinus</u>	<u>trilobatus</u>
<u>C.</u>	<u>fasciatus</u>
<u>Chromis</u>	<u>dimidiatus</u>
<u>C.</u>	<u>axillaris</u>
<u>Dascyllus</u>	<u>aruanus</u>
<u>D.</u>	<u>trimaculatus</u>
<u>Amphiprion</u>	<u>ephippium</u>
<u>A.</u>	<u>chrysogaster</u>
<u>Diodon</u>	<u>hystrix</u>
<u>Synaceichthys</u> (<u>Synanceja?</u>)	<u>verrucosa</u>
<u>Harengula</u>	<u>ovalis</u>
<u>Paracanthurus</u>	<u>hepatus</u>
<u>Ctenochaetus</u>	<u>strigoaus</u>
<u>Pomacanthus</u>	<u>semicirculatus</u>
<u>P.</u>	<u>imperator</u>

*印は毒魚を示す。

現地収集資料リスト No. 2

表2-2 1876年, 官報№59によって販売を禁示されている魚介類

地方名	和名	学名	名
Croissant queue jaune	バラハタ	<u>Variola</u>	<u>louti</u>
Vieille saint silac	スジハタ	<u>Plectropomus</u>	<u>maculatus</u>
Vieille tukula	マダラハタ	<u>Epinephelus</u>	<u>fuscoguttatus</u>
Vara - vara	バラフエダイ	<u>Lutjanus</u>	<u>bohar</u>
Chemise	イシテンフエダイ	<u>L.</u>	<u>monostigmus</u>
Vieille cuisinier	アオノメハタ	<u>Cephalopholis</u>	<u>argus</u>
Vieille cheval de bois	アヅキハタ	<u>Anyperodon</u>	<u>leucogrammicus</u>
Chemise	ヒメフエダイ	<u>Lutjanus</u>	<u>gibbus</u>
Sardine	ミズン	<u>Harengula</u>	<u>ovalis</u>
Vieille plate	オオモンハタ	<u>Epinephelus</u>	<u>areolatus</u>
Bénitier	シャコガイ類	<u>Tridacna</u>	<u>spp.</u>
Oursin	カンガセモドキ	<u>Echinothrix</u>	<u>sp.</u>
La Tortue Caret	タイマイ	<u>Eretmochelys</u>	<u>imbricata</u>
Laffe la boue	オニグルマオコゼ	<u>Synanceja</u>	<u>verrucosa</u>
Boule tangué	ネズミフグ	<u>Diodon</u>	<u>hystrix</u>
Remora Sharsucker	ナガコバン	<u>Remora</u>	<u>remora</u>
Crabe onze taches	アカモンガニ	<u>Carpilius</u>	<u>maculatus</u>

現地収集資料リスト№3

(3) 漁獲量

モーリシャス国の1977年から1979年の総漁獲量は、表2-3に示すように6,000tから7,500tで、減少傾向を示している。漁業別では、表2-4に示すように、ラグーン漁業による漁獲が全体の約60%を占め、残りはバンク漁業による漁獲で、内水面漁業は極めて少ない。

漁獲魚種は、フエフキダイ類が最も多く、全漁獲量の約40%を占め、ハタ類、アイゴ類、ニザダイ類、スズキ類がそれぞれ全体の5~8%を占めている。

漁業別の漁獲魚種は、表2-4のように、ラグーン漁業ではMauritius島とRodrigues島の魚種の構成は類似しており、クコ、ニザダイ、アイゴ類、ヒメジ、ブダイ、スズキ類の漁獲が多い。バラショツではアイゴ類、ヒメジ、ブダイ類が漁獲されている。バンク漁業では、漁獲魚種の90%以上がフエフキダイ類でラグーン漁業とは、その対象魚種が異なる。

表2-3 年次別総漁獲量及び魚種別漁獲量

(単位：t)

魚 種	1977	1978	1979
ハ タ 類	342	380	314
ア イ ゴ 類	525	415	486
ニ ザ ダ イ 類	446	466	491
ヒメジ・ブダイ	684	651	537
フエフキダイ類	3,260	3,404	2,310
スズキ類	382	444	340
ボラ類	157	240	185
カイワリ属(類)	156	225	190
アジ類	9	42	1
イワシ類	39	33	60
サバ類	9	7	16
マグロ類	400	8	21
サメ類	2	9	18
エイ類	4	7	8
雑魚	576	418	489
ロブスター	24	18	48
エビ類	11	-	0
タコ	528	458	566
カキ	0	-	0
淡水魚	1	5	15
総 計	7,556	7,230	6,095

現地収集資料リスト№4

表2-4 1979年漁業別・魚種別漁獲量

(単位：t)

	ラグーン漁業			バンク漁業	内水面漁業
	Mauritius島	Rodrigues島	バラショワ		
ハタ類	99.6	136.6		47.7	
アイゴ類	180.4	237.8	5.6	17.3	
ニザダイ	190.7	251.4		1.0	
ヒメジ・ブダイ	208.2	274.4	2.2	0.5	
フエフキダイ類	101.1	138.6	0.7	2,039.7	
スズキ類	117.7	161.4	1.8	23.6	
ボラ類	70.6	93.0	0.5	2.7	
カイワリ類	37.0	48.7	0.2	95.6	
アジ類	0.4	0.6			
イワシ類	55.4	—			
サバ類	6.3	8.2			
マグロ類	17.0	—			
サメ類	7.2	9.5			
エイ類	3.3	4.3			
雑魚	190.4	251.0			
ロブスター	18.6	24.5			
エビ類	0	—			
タコ	245.1	260.0			
カキ	0.3	—			
淡水魚					15.0
総計	1,549.3	1,900.0	11.0	2,228.1	15.0

現地収集資料リストNo.4

